

## 「活動の概要と研究成果」

NO.J2415

活動題目:現代インドの宗教規範に対する西洋近代科学受容に関する人類学的探究:ジャイナ教徒の公益訴訟活動を事例に

所属:東京大学総合文化研究科

氏名:西坂季恵

本研究は、インドの宗教少数派であるジャイナ教徒が、自らの宗教的規範をいかに西洋近代科学と接続し、説明しているのかを明らかにすることを目的とする。ジャイナ教は仏教と同時期に興起したインド発祥の聖典宗教であり、不殺生戒に基づく多様な規範を持ち、出家者だけでなく在家者においても日常生活に深く影響を及ぼしている。とりわけ在家者たちの日常生活においては、食事や就業に関する規範が立ち現れやすい。また、国を超えた商人としての移動を通じて、西洋近代的価値観と接触する機会が多く、それが宗教規範の受容と変容に大きく関与してきたと考えられる。

本研究では、ジャイナ教徒が請願者となった2件の公益訴訟——2022年の「食肉広告取り下げ公益訴訟」と2015年の「死に至る断食公益訴訟」——を起点とし、宗教的信条がいかに近代憲法や科学的言説と折り合いをつけながら社会的主張として展開されているかを探究することを目的とした。

本報告書では2つの事例を取り上げた。事例1は、「食肉広告取り下げ公益訴訟」において、ジャイナ教徒たちは宗教的な不殺生戒を訴えるにとどまらず、環境保護、動物愛護、青少年教育への悪影響など、憲法や西洋近代的価値観に沿った合理的な論理を用いて主張をおこなったことである。事例2は、月経中の女性の寺院参拝を避けるべきだという宗教規範について、ある在家信徒が説明の相手に応じて「身体の不調」という科学的な語りと、「ネガティブなエネルギーの影響」といった宗教的語りを使い分けていたことが観察されたことである。

以上の事例を通して、ジャイナ教徒たちは宗教的实践を一方的に伝統として維持するのではなく、相手や状況に応じて柔軟かつ戦略的に説明の枠組みを調整していることが明らかになった。本研究は、宗教と科学が対立するものではなく、重なり合い交渉される領域であることを、現代インド社会の宗教実践の現場から示すものである。